

卷頭言

こゝに道あり 日高白象

道は人が歩くところに存在している。たとえ道があつても誰も歩かなければ草におよばれて自然の原野に化してしまつ。言うなれば道があるから人が歩くのではない。人が歩くから道が道として存在しているのだ。仏道というのも、これと同じことであつて、仏祖の歩かれた道があるから、その道をたどるのでなく、仏祖の示された真理、教えを実践するからこそ、仏道が仏道として存在するのであるまい。

若しこの実践をぬきにして、どこか遙か彼方に、仏祖の歩かれた仏道が、あたかも地上の道路のように存在すると思うならば、それは甚しい錯覚であり、また求道の美名にかられて、その道のみを汲々として求めることは、さながら木にのぼって魚を求めるようなものであろう。

仏法実践をぬきにした仏道、それは机上の理論であり観念にすぎない。実は仏法実践の当處、既に仏道は現成している。仏道を求めてから仏法を実践するのではない。道は行手にあるのではなく、実践の足下にある。踏みしめる一步一步に切り開かれ形成されている。それ以外に道はない。道は実践を体として創造される。道は実践者のものであり、人が道を歩くのではなく、道が道を歩いている。「仏道はるかなり」というのは修行の怠慢をいましめた言葉にすぎない。なるほど怠慢者にとっては道は遠い。然し実践者にあっては道は足下にあり、しかも一筋でなく八方無尽に、そこから果しなくひろがっている。

卷頭言 こ こ に 道 あ り 日 高 白 象 3

諸宗本尊対比へその二▽

4

日蓮聖人の本尊観

12

煩惱をすてずにハその二▽

29

日蓮聖人の懺悔

32

仏像は生きている

32

読者の広場

29

至難な文書伝道

29

青年のために

29

南方タイ国で鷲峰再刊号に接して

29

同行の心の中に

29

寸言コ一ナ一

国宝とは

34

本仏の息吹き

34

仏法山脈

34

インドへ太鼓を送りましょう

34

発刊近し如来法王使・日蓮聖人伝

34

本誌賛助者御芳名

34

誌友紹介

34

本誌賛助者御芳名
誌友紹介

34

後記編集

34

諸宗本尊対比 ▲その二▽

日蓮聖人の本尊観

これは、昨年十二月四日遷化された執行先生の録音テープを再録したもので、本誌通巻第三十八号の続きである。内容は真言・天台・浄土・禅及び創価学会の本尊観と対比しながら、日蓮聖人の本尊観を追究している。

立正大学教授 執行海秀

剣を持った人も、相手の人も、共に怪我をすることが少くはありません。そういう意味で最も勝れた剣を持つ者は、宮本武蔵のように熟練した人でなければなりません。なまはんかな者が持てば、子供が刃物をもつたように、あぶなくてしようがないようなものです。

そこで密教という信仰は、本当に修行して自身を鍛えに鍛えあげてゆかなければ、密教を信じても駄目だ、ということになります。何故ならば、たとえ剣はどんなに勝っていても、剣が勝手

真言の加持祈禱というものは、大日如来の加持力を仰ごうとするものです。然し祈禱の実際の力は、自然にそなわった自分の天性によるものもありますが、殆どは祈禱をする人自身の、苛烈なる修行練成によって、はじめて得られるものです。丁度、剣道と同じで、宮本武蔵のように厳しい修行を経て、その域に達するのです。この場合大日如来の法というものは、あたかも剣(つるぎ)のようなものであって、剣を持つ人によっては充分役に立つこともあります。時には却って、

に働いてくれるのではなく、剣を動かすのは人で
あるからです。つまりその人が大日如来にならな
ければ、その剣は大日如来の剣として働かない、
ということになって來るのです。

然しそれでは困ります。自分は煩惱にみちてお
り、大日如来というような偉い人には到底なれな
いのですから、大日如来の加持力を仰ぐという意
味で、加持祈禱というものが出て来ます。それで
も加持祈禱をする本人が、やはり修行に修行を重
ねて、剣を自由自在に振り廻わすほどの力をもた
なければ、剣だけでは役に立ちません。以上は譬
えですが、教学とは関係なしに実践面において、
こういう考え方があるようです。

さて日本佛教が鎌倉時代になって、どういうよ
うに展開したかというと、そういう宗教を「自力
の宗教」といって切り捨ててしまつたのです。切
り捨てたのは法然上人です。則ち法然上人は、
「私たち凡夫の力によって、宗教を自分のものに
しよう、真理を自分のものにしよう。そして自分

が自由自在に活躍することの出来るスーパーマン
になろう、というような宗教は、本当の宗教では
ない」

とも張したのです。

一方、密教の立場からは、「本質的には人間は凡夫
ではない、という立場に立つたのです。
一方、密教の立場からは、
「本質的には人間は凡夫ではない。本来人間は仏
である、端的にいえば神である」

と主張して、人間の本質は神だ仏だ、という立
場に立っているのです。つまり、

「すべてが大日如来であるという悟りの世界から
みれば、人間すべて大日如来であるけれども、墮
落して人間となり、凡夫となつているのであるか
ら、修行さえすれば、元の本質そのものに戻るこ
とが出来る」

というような考え方をしているのが密教です。

これに対して法然上人は、

「人間は、もとより弱い凡夫である。そこで我々は阿彌陀如来によって救われなければならない」

というような考え方を展開して來るのです。つまり、

「宗教というものは、弱者に対するものでなくてはならない。宗教が自覚という面を強く打ち出すのでなくて、反省という面を打ち出すのでなければならぬ」

というのです。

密教の場合は、どちらかといえば人間が強い自

覚の上に立った場合「自己即大日如来」になってしまいます。ところが法然上人の場合には、

「そういう自覚は本当のものではない。本当の自覚というものは、我れ凡夫なり、という反省そのものでなければならぬ」

と考えたのです。

そこで阿彌陀如来という報身の仏……これは難しい言葉になりますが、密教の場合は法身の仏と

いって真理そのものを指し、真理を人格化して大日如来といっているのですが、真宗や浄土宗ではそういう仏はおがみません。

「そういう仏は、あっても仕様がない。我々は、とてもそんな世界へは行けないのだから」

といって切り捨ててしまつたのです。そして報

身の仏といって、曾つて法藏菩薩が五劫の思惟だとか十劫思惟という長い間、色々な修行をするに当つて「すべての人々を救わなければ自分は仏にはならない」という願をたてられた「その願、本願こそ宗教の本質である」ということになつて來たのです。

そして法藏菩薩が、人間の智慧では計ることも出来ない長い無限の時間における、下化衆生の化他行・菩薩行によって、報いの身——報身としての阿彌陀如来となられたのであるから、我々は既に阿彌陀如来によって救われている、という考え方方に立つたのです。つまり私たち凡夫を救つて下さるという弥陀の立場において、弥陀を本尊としてあがめようとしたわけです。

この報身仏に対する仁が、ビルシヤナ仏という法身仏であって、宇宙に遍満する真理そのものであります。然し真理は形としてあらわすことは出来ません。人間は何とかそれを形の上であらわして来ないと穎然としませんので、奈良の大仏のような大きな仏像が造られたわけです。あの巨大な仏像は宇宙に遍満している真理そのものゝ広大さを象徴したのであって、奈良の大仏は大日如来ではあります。が、一種の大日如來の性格に近い仏として造られたのです。

こうした真理を人格化した法身仏に対しても、報身如來という仏を、法然上人は説くわけです。報身の仏とは、親が子供を愛するような、親子の関係にあるものであって、親は子供に一步さきんじて修行をし、子供を育て導いて行く。子供は成人して、やがて親となつても、親子の関係というものは厳然としており、親が子供のために働いて、子供を養育しているように、阿弥陀如來があつてその如來が衆生を救つて下さるのだから、我々も仏になることが出来るのであり、親が子供を生み

放しでは、子供は死んでしまうばかりはないようになります。親があつて子供があり、まず仏があつて凡夫があり、その仏は我々を何とかして救おうという大慈悲のうちに存在しているのであるから、そういう報いという愛とか慈悲というものが、宗教の本質である、というのです。

さきほど申しましたような、真理とか絶対真理といふものが、仏の性格ではなくして、それも否定はしないで、ようけれども、仏の表面に出で来るものは、愛であり、慈悲である。愛とか慈悲といふものが、仏教の本源といえば、それは救いの宗教である。我々が修行して仏となる宗教ではなくして、救いによって救いにあずかり、その救いに乗じて、我々は仏になれるのだ、という立場の上に宗教を展開して来たのです。

そこで、これを譬えて申しますと（法然上人はそういう譬えは用いていませんが）こゝから京都まで歩いて行くとします。こゝに地図がある。地図をたよりにテク／＼歩いて行く。道に迷いながらも歩いて行く。これを法然上人は自力の宗教

聖道門といったのです。これに対して自分の力ではなく、仏の愛によって、親の力で子供が育つてゆくような立場でいるのが、他力の浄土門だ、といったのです。

これは子供が、我がまゝ言い放題、甘え放題していくても、親は助けてくれる。何もしないで遊んでばかりいる。悪くいえばゴクツブシのような子供でも、親は育てゆかねばならない。そういう親のもつ愛情・慈愛そのものが阿弥陀仏だ。我々はゴクツブシみたいな子供、凡夫である、とみたのです。

そこで、さきほど申しました聖道門の人たちはこゝから京都までテク／＼地図をたよりに歩く。つまり教えを手本として歩いてゆく。教えがないと道に迷つたり真直にゆけないから、一応教えに従つて、教えのように修行してゆく。すると京都につける。仏になれるということになります。然しこれでは時間がかかります。或は途中で倒れてしまうかも知れません。

これに対しても、法然上人の考えた浄土門という

のは、仏乗に乗ずる、そういう自分の力まかせに歩いてゆくのではない。仏乗、仏の乗物に乗る、と考えたのです。

阿弥陀如来の救いの手に乗ること、おまかせすること、自分の我をすて、自力をすてゝ全部如来にまかせきること、この弥陀の本願に乘じさえすれば、親のことをきいていさえすれば行けるという考え方です。これを他力といったのです。

三千年前のお釈迦さまの時代には、自力で修行して悟りを開いた人もいたかも知れないけれども今日のような末法の世の、生活のきびしい時代には、なか／＼そういう宗教によって悟りの開ける人は出て來ない。そこでむしろ阿弥陀如来の乗物に乗つた方がよいではないか。飛行機や新幹線に乗る場合、落ちるかも知れない、脱線するかも知れない、と思えば乗れませんが、仏の乗物を信じさえすれば、自分の力でなく、居ながらにして京都に着ける。これよりたやすく早いものはないと云つて、テク／＼歩く聖道門は「難行道」。乗物に乗る浄土門は「易行道」と主張したのです。

法然上人のいうところは一理はあります。何故かといえば、法然上人以前の天台・真言の考え方が自力門に立っていたからです。自力門の場合、そこに何が根底となっているかといえば、今日の思想とつながるかも知れませんが、もうくの善を修し、自力の力を尽して、あらゆる善根功德を積む、ということです。

たとえば立派なお寺を建てたり、沢山な寄附をしたり、或は沢山なお念仏を唱えたり、修行をしたりして、そういう功德の力によって仏になれる淨土へ行ける、と考えていたのです。そこで貴族や金持ちが競ってお寺を建てたり、沢山な寄附をしたり、念仏も数多く唱えては修業したのです。

然し、法然上人は考えたのです。貴族や金持ちは仏になれるかも知れないけれども、そのような善根功德をつむことの出来ない貧乏人や、修行をする暇もないほど生活に追われている者は、どうなるのだ。功德をつむことが仏に通ずることではない。たとえ何は出来なくても、弥陀を信する者のみが仏になれるのだ、と主張したのです。どん

なに立派なお寺を建てても、どんなに沢山な寄附をしても、自分の心の中で、これだけの善根功德をつんだという考え方をもっている者は、仏のもとへは行かれない、といったのです。

仏教にはもとく「長者の萬灯、貧者の一灯」という謡もある通り、ものによつて功德を換算しようとする考え方を否定したのが、法然上人の宗教改革であつたといわれています。

法然上人は「俺が」「俺の力で」という考え方を否定して「おかげさまで」という考え方になつたのです。「すべてのもの、おかげで育つてゐるのだ」「自分にはそれだけの力はないけれども、ひきあげてもらい押しあげてもらつているのだ」という報恩感謝の念を正面にうち出したのです。それは仏に対する感謝にほかなりません。

この点を更に押しすゝめて真宗になりますと、絶対他力をいゝ出して「弥陀を信ずることが出来るのですら、それは自分の力で信じてゐるのではありません。弥陀の本願力に催うされて、仏を信することが出来るのだ」というようになつて来ています

そこで、真宗では（これは後で問題となります）「自分が仕事をする」とはいわない。「させ頂く」という。たとえば選挙で当選するとしますと「俺が当選した」とはいわない。誰でも「皆さまのおかげで当選させて頂いた」というように「働かさせて頂きます」というのです。

ところが自力門の考え方では、「俺が俺の力で当選したのだ。これからも俺の力で行政を改革してゆくのだ」というように、自己中心的におのれの我（が）がさきに動いてゆきます。

自分の力を中心に、ものを考えてゆこうとするのは、天台や真言に、その傾向が強いのですが、浄土宗や真宗では「自分は無力だ。皆さまから押されているのだ。自分で仕事をしているのではない。皆さまのおかげで、させて頂いているのだ」という受動的な形に変って来ています。能動から受動へ展開しているのが浄土宗や真宗の考え方です。この転換をやったのが法然上人その人です。

たとえば船が難破した時、泳ぐ力のある人は泳

ぎます。そこには自力が認められています。然し女や子供で泳ぐ力のない者は、助け船の来るのを待つほかはありません。助け船は、泳げない人から救い上げます。阿弥陀如来もまた自力の力よりも他力を頼む人の方に、まず強い慈悲を及ぼすものである、というのです。

あたかも親が、一人前の子供よりも、満足でない子供の方に、一層深い慈愛を注がれるように、阿弥陀の本願は、強いてよりも弱い者へ、持つ者よりも持たざる者に、より強い慈悲があらわれて来るものであり、「ひたすらに阿弥陀を念じて自力を没」、阿弥陀に帰依する心、これが宗教だ。自分の力であらしよう、こうしようと計画を立て、遠くはみずから絶対者にまでなるうということなどはそういうものは、もう宗教ではないのだ」という考え方がある、浄土門の中の根底にあるわけです。

日本仏教には、以上述べましたように、自力と他力という二つの修行の在り方が、こゝに出て来たわけです。然し実存的に考えますと、「救いの

ついていて仕様がないではないか」とか「新幹線はあるから乗れるが、弥陀の本願とか、如来の願船とかいつても、肝心の弥陀がいるか、いないか判りもしないものに、いくらかがつても無駄ではないか」という意見も起っています。

然し実存主義的に考えますと、宗教は成立しないのです。淨土門では阿弥陀如来は絶対に実在するものであり、弥陀の淨土も厳然としているといふ立場に、はじめから立っているのです。そして弥陀の慈悲は、我々が自己を没した時、我々の上に直ちにあらわれて来る、という信仰がたてられてゐるのです。

ところが聖道門では、こういう信仰は成立しないのです。厳密にいって、そういう仏や、仏の世界は、客観的に存在しない、という立場にあるのです。

これは随分前の話しだすが、真宗の学者であった金子大榮さんが、

「唯心の弥陀、己心の淨土」ということを主張しました。即ち、西方十万億

土のかなたに、本当に阿弥陀如来がましますのではない。あれはそのような理想の世界をえがくところのものであって、自分の心の中の弥陀こそ実在するものであり、我々の住んでいる現実の世界が、本当の淨土でなければならぬ。十万億土のかなたに客觀の淨土があるのではない。客觀の阿弥陀如來がましますのではない。そのように信することは宗教ではあるけれども、本来はそうではないのだ。それは本当の悟りを開かせるために一つの過程としてもうけられた方便にすぎない、といったのです。

これは全く聖道門的な考え方であつて、當時、淨土門の中では隨分論議をかもしたものですが、こういう主張は淨土門では成立しないのです。あくまでも、まず親があつて子供があるというようになります。まず如來がましまして凡夫があり、凡夫は如來の他力による以外、救われようはない、というのです。

△以下次号▽

煩惱をすてずにへその二▽

日蓮聖人の懺悔

巨人日蓮聖人の此の矛盾的人間像の中に

日高明白象



日蓮聖人といえば、世の一般の人々は、蒙古襲来という有史以来未曾有の大困難に際し、北条幕府に対して国家諫諭（かんぎょう）を敢行した日本佛教史上でも異色の豪僧であるとか、鎌倉時代の憂國の傑僧であるとか、或はまた「念佛無間・禪天魔・真言亡國・律國賊」という四個格言（しかかくげん）をもつて他宗を攻撃してやまなかつた斗争的な怪僧、といったような印象しかもつていなうようです。

そうした人々に対しても、

「実は、その日蓮聖人こそ人間的な深い内省懺悔の心に徹しておられたのだ」
というならば、耳を疑うか、まるで獨にでもつまゝれたかのように、いぶかしげに思われるのが殆どであります。更に、
「日蓮聖人の対外的な、あの激しい折伏（しゃくふく）精神とその行動は、むしろ聖人の内省的な深い懺悔の心から発したものである」
というならば、ます／＼理解に苦しみ、対内的懺悔と対外的折伏の、兩極矛盾した性格を持った

ような巨人日蓮聖人の人間像に対して、群盲象を撫でるの感を覚えることでしょう。

何故ならば、これまでの日蓮聖人については、热血ほとばしる豪壮な言動ばかりが強調されていて、その半面、静かな深い人間的な内省ということが、殆どかえりみられないからです。

それほど聖人は、滅後七百年を経た今日でさえも、世の一般の人々から皮相的な偏見の眼でみられ、甚だしく誤解されて来たとも申されましょうし、また歴史上の人物の中で、聖人ほど曲解された人はない、とも申されましょう。

然し、こうした偏見の傾向は、独り一般社会の中のことだけでなく、聖人を祖師と仰いでいる日蓮門下各派教団の中でも、同様にいえることなのです。むしろその傾向は、聖人を絶対的な存在として超人化したり、偶像化している信徒の中に、一層根強いものがあるといつても過言ではあります。せん。

聖人を崇拜するあまり、超人化したり偶像化してしまったのでは、却って量(ひいき)の引き倒

し、聖人の眞実の姿の判らうはずではなく、まして聖人の信仰の眞実にふれることも出来なければ、その信仰を継承することも出来ようはずはありません。

聖人は超人でもなく、偶像でもなく、あくまで「法華經の行者」であり、我々と同じ地平線上に立っていた人なのです。雲の上の人ではなく、大地の上の人であったのです。大地の上に立ったその大きさが、常人には想像することも出来ないほどのものであつただけに、その大きさに眼を奪われ、足下の大地までも、我々の大地とは次元を異にするかのような錯覚を起したところに、聖人に對する超人感や偶像感が起きて来たものと言えないことはありません。

蓋し内省懺悔をともなうこともない絶対的存在としての、超人日蓮觀や偶像日蓮觀の起きて来た最大の原因の中には、聖人自身の「上行自覺」という教学上の問題を数えることが出来ましょう。

申すまでもなく、聖人の信仰の依り所とされた

經典は「一切經の經王」とうたわれた法華經でした。その經典の中には、第十五章の從地涌出品から第二十二章の嘱累品までの八品の間において、

久遠の本仏釈尊から、末法の法滅尽時に際して、この法華經を宣布するよう、經典付嘱をうけた上行・無辺行・淨行・安立行という四大菩薩を上首とする、無量無辺なる菩薩團のことが説かれています。

これらの菩薩は、始めてなき久遠の昔、本仏釈尊がはじめて悟りを開かれて佛陀となられた当初、一番最初に直弟子となつた人々ばかりであり、爾來、久遠の間、娑婆の大地の下の虛空会（こくうえ）という、娑婆に即する唯一の淨仏國土において、常に本仏に隨順し、静かに法華經をたもち、法華經を念じ、法華經を行じて退転することなく地上における末法滅尽時に、本仏の勅使として活躍することを、しかも久遠の間、待機していたものであり、今よりおよそ三千年の昔、インドの靈鷲山上の虛空会の会座（えざ）に、釈尊より召喚の勅命をうけて、大地の下より、大地の地殻を

割って涌出した人々なのです。

これらの菩薩は、大地より涌出した出現の儀相から通常「地涌の菩薩」といわれ、その靈格をたずねて、釈尊と等格の菩薩とも覺（おぼ）しき文殊（もんじゅ）菩薩や弥勒菩薩に対校すれば、さながら帝釈天と、その末輩眷属の猿とを比較するようなもので、全く較べものにもならないほど高貴な菩薩であった、とされています。

聖人は、みずから信仰と、その行動を、法華經の鏡に照した上で、これら地涌の菩薩の上首第一等である上行菩薩の使命に生きるという、所謂「上行再誕」の自覚に立たれていました。

この自覚はおそらく建長五年四月二十八日（聖壽三十二才）の立教開宗當時より、既に内観として堅持されていたものであります。然しながら、それが弟子一門の前に表明されるようになつたのは、迫害多難な法華經宣布の実踐行動を通して、法華經色読の裏付けを全うした文永八年（聖壽五十才）の「龍ノ口法難」につづく「佐渡流罪」に前後する頃からのことでした。

爾來、聖人の上行自覺にちとすく法華經信仰の真髓が、御心本尊鈔・開目鈔・撰時鈔・報恩鈔などと、相つて發表された論述の中に横溢して来るのですが、蓋し聖人の上行自覺なるものは、インド・中国・日本という三国佛教伝來の歴史的な過程上、法華經弘通の先師先哲の跡を繼承するという連續的法脈相承（教學上では外相承……げそじょう）の中から發したものではなく、その伝統的系譜を一往踏んばえたがらも、むろそれを飛躍超越して、直接本仏釈尊に直結し、本生釈尊より法華經宣布の付嘱をうけた上行菩薩の使命をみずからの使命として立つという、非連續的法脈相承（内相承）の立場より發したものであって、たとえ聖人の四百余篇の全遺文中、

「自分こそ上行菩薩の再誕である」

というように、正面きつて直接それを表明されることはなかつたとしても、たとえば種々御振舞御書の中に、

仏滅後二千二百二十余年が間、迦葉・阿難

等、馬鳴・龍樹等、南岳・天台等、妙楽・伝

教等だにも、未だ弘め給わざる法華經の肝心諸仏の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始めに一闇浮提（いちえんぶだい一全世界）に弘め給うべき瑞相に、巨蓮魁（さきがけ）したり。

和党ども二陣三陣つゞいて、迦葉・阿難にも勝れ、天台・伝教にも起えよかし。

と、男子一門の人々を叱咤激励された言葉や、或は報恩鈔の中に、

「汝が慈悲曠大なうば、南無妙法蓮華經は万年のほか未來までもあるべし。日本國の一切衆生の眞目を開ける功德あり、無間地獄の道を塞（ふさ）ぎぬ。この功德は伝教・天台にも超え、龍樹・迦葉にも勝れたり。」

と法華經をたゞえられた言葉等には、聖人の外相承譜を超越した内相承譜における、上行の自覺と自負とが端的に現わされているものであり、またこの自覺と自負がなくしては、これほどのことを言い切られるはずはない、と申せましょ。

およそ、まことの信仰といふものは、時間・空

間を超越するものであり、連續の相対世界より、非連續なる絶対世界へ転ずるものであります。久遠の本仏釈尊を本尊と仰いだ聖人が、仏滅後二千二百二十余年という歴史的時間を超越し、あまたの先師の系譜をも超越して、直接本仏釈尊に面奉（めんぶ）し、みずから上行菩薩の使命に燃えたつに至つたのも、蓋し必然のことであつた、と申せましよう。この必然性を聖人は、

「たゞ時のしからしむるのみ」

という一言に言い切られているのです。

既に、聖人みずから上行の自覚と自負に、その全生命を躍動させ、燃焼されていた以上、聖人を祖師と仰ぐ日蓮門下の人々が、聖人を上行の再誕と信ずるのも当然のことであり、その信を中心として、伝説後未曾有の法門を開闢された事蹟や、國家諫諫を主体とした聖人の果敢なる布教活動、これにともなう重鬱たる法難迫害、そのたびごとに起つた数々の奇蹟……等々の、聖人の破乱万丈たる生涯を色彩つた偉大なる絵巻図を思いあわすれば、殆どの人々が、

△日蓮聖人は先天的な超人であり、他に類もない偉大な聖者として、その言動には反省すべき何ものもなく、また懺悔すべき何ものもないはずであり、むしろ無いのが当たり前である▽

というようにも思ひ込んでもしまうのも、また当然のことでしょうし、そこには、聖人みずから常に深い内省と懺悔に徹しておられたという事実を、かえりみる余裕すらないことかも知れません。

まして聖人が、久遠劫來、本仏筆頭の直弟子である上行菩薩の再誕という自覚と、過去遠々劫來生々流転して来た罪惡深重なる人間懺悔との、この絶対矛盾した両極性を、しかも同時に、更に両者渾然一体のものとして具足され、それによつて聖人の人間像が、巨峰の如く形成されていたという事実に気付いて、これを理解し得る人の稀なることも、蓋し無理からぬことであつたかも知れません。

然しながら、これまでの伝承的な聖人の伝記によらず、また既成概念をぬきにして直接聖人の著

わされた御遺文をひもといてみれば、聖人自身、

上行の自覚と自負の強くなればなるほど、罪業懺

悔も強くなつており、罪業懺悔の深くなればなる

ほど、上行の自覚自負もまた深くなつて来ている

のです。つまり此の矛盾した両極の、自己を讃嘆

する最高の自己肯定と、自己を懺悔する最底の自

己否定とは、あたかも車の両輪のように、或は鳥

の両翼のように平行し、比例し、自秉しあつてい

るのです。

上行の自覚と自負が表明されるようになつたのは、文永八年の「龍ノ口法難」につゞく「佐渡流罪」の頃からであることは、既に前にも述べた通りですが、その頃より聖人みずから罪業懺悔が痛酷なほどまでも告白されて来ています。それは念佛門における親鸞上人の、愚禿（ぐとく）と懺悔された比ではありません。

親鸞上人の懺悔は、末法の世の劣悪無残なる内

間機根觀が、よりどころとされていました。そし

て末法の一切衆生の機根は、すべて聖道門（しよ

うどうもん）の自力の修行には堪え難しとして、

救いを弥陀一仏に求めて行つたのです。

これ対して日蓮聖人の懺悔は、撰時鈔に、

機に随つて、法を説くと申すは、大なる辭見

（びやっけん）なり。

と示されている通り、人間の機根によらず、本仏釈尊にそむき、その正法たる法華經を誇つたりないがしろにしたという謗法觀（ぼうばうかん）が、よりどころとされていました。

そして法華經宣布のため競い起つて來た大難四ヶ度、小難數知れずという法難迫害のさなかにあっても、その責任を法敵・迫害者に求めず、むしろ過去および過去世における自らの謗法の罪に帰せしめ、その罪を、迫害者の不信謗法の罪と共に懺悔して、

若しは信、若しは謗、共に仏道を成す

という信謗不二の立場から、本仏釈尊への帰一法華經への帰一を強調して行つたのです。

親鸞上人には、末法の衆生の罪惡深重なる、無儀無愧なる姿に悲泣慨嘆しても、現在の果

に自分自身の中に、その責任を求めるということではありませんでした。どうにもならない人類宿業の歴史的流れの中に、自分自身もその一人として人類の宿業を共感し、その業苦より如何にすれば脱れることが出来るか、ということを信仰の出发点としていたのです。

従つて親鸞上人には、帰一すべき弥陀に対する不信誇法を懺悔することよりも、既に末法の衆生は、懺悔するにも懺悔しきれないほど罪惡深重であるという認識をたてまえとし、そうした衆生をこそ、正機として救済しようとされているのが弥陀の本願であるとして、悪人正幾・绝对他力という信仰を樹立したのでした。

それは単なる「罪惡の容認」ではなく、徹底した「罪惡の認識」であり、その認識による絶対自己否定と、そういう者に対する弥陀の絶対肯定との接点が、南無阿弥陀仏という専修念佛に求められたのです。

これに對して日蓮聖人の場合は、たゞ現在惡の認識にとどまるところなく、あくまでも三世因果の

鐵則にのつとり、社会と個人との現在惡の、よつて來た根源的な本因を、悉く誇法の罪として受けとめ、自ら犯した罪の事實を、今生のみならず過去世から久遠の昔にまでもさかのぼつて、追求されたばかりでなく、人の誇法の姿をみるにつけても、それをそのまま過去および過去世において犯した自分自身の誇法の姿を、如実に写し出したものと觀じて、人の誇法の罪をいましめることによって、自身の誇法の罪を懺悔し、自身の誇法の罪を懺悔する底において、人の誇法の罪をいましめ、その懺悔が深いほど、他に對する誇法苛責、折伏伝道も苛烈をきわめ、それより惹起する法難迫害を甘受し忍従することによつて、自身の誇法の罪の消滅する証しとされたのでした。

私尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華經の五字法蓮華經というお題目の功德については、観心本尊鈔に、

私尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す。我等この五字を受持すれば、自然

(じねん)に彼の因果の功徳を譲り与え給うと示されている通り、本仏釈尊の久遠にわたる修行・成道・救濟等の一切の功徳を包含した、本仏釈尊の血肉であり、命そのものでした。そこで本仏釈尊を本尊と仰いで恋慕渴仰し、このお題目を但信口唱するところ、その場において、お題目に包含された本仏釈尊の一切の功德は、我れにもあらず、本仏釈尊の方から、その慈悲神通によつて、色香も変えず譲り与えられて來るのです。こゝに本仏釈尊の血肉は、我が血肉となつて躍動し眞の仏子として成仏が決定され、人生百八十度の大転換も起きて來るのです。

然し、こゝで注意しなければならないことは、本仏釈尊の功德をうけることが、そのまま罪の消滅になるとは限らない、ということです。善はあくまで善にして惡に替ることはなく、惡はあくまで惡にして善に替ることはありません。善因には必ず善果の報いがあり、惡因には必ず惡果の報いがあるのです。大善の功徳によって小惡の罪も消滅するということが、たとい人間の情実

として許される場合はあっても、法界の因果律は嚴然としていて変えられるものではなく、たとえ小惡といえども、その罪果をまぬがれることは出来ないのです。

これと同様に、お題目を唱えることによつて、本仏釈尊の無量の功德を譲り与えられることは、確かに願つてもない無上の大果報ではありますが然しこの果報の大なるによつて、直ちに罪果まで消滅するものと考えることは、因果の理を曲折した見見であつて、果報は果報、功德は功德としてうけながらも、懺悔しない限り、なお界の因果は罪の因果として、そのまま残るものなのです。

日蓮聖人が、みずから上行菩薩の再誕という自觉自負に立たれながらも、同時に過去の誣法の罪科を懺悔し、懺悔の底において、人々の誣法を折伏してやまなかつた所以、並にその折伏のために巻き起つて來た幾多の法難迫害を甘受し、これに忍従することをもつて「滅罪の証し」として、限りなき法悦にひたられて來た所以が、こゝにあつたのです。

親鸞上人の念佛信仰にあっては、末法の一切衆生は、弥陀の攝取不捨の本願力によって既に救われているので、みずから唱える念佛も、人に対するもので唱えせしめる念佛も、悉く弥陀に対する報恩行である、とされていました。

それは末法の衆生の人間機根観にもとづくものであって、たゞ一切の罪の根源が誘法罪にあるとして、それを如何に強く示摘されようとも、最早その罪を消滅する力さえもないのが、末法のすべての人々の実体である、という立場に立っていたため、念佛の一行も、報恩行にとゞまらざるを得なかつたものと申せましょう。

これに対して日蓮聖人の立場にあっては、本仏釈尊に対する報恩行は、みずからの誘法を懺悔すると共に、人々の誘法をも懺悔せしめずにはおかないという折伏伝道の形であらわされて來てゐるのです。それは、無量深重なる罪を背負つたまゝなる我が身を、なお仏子としてみそなわされる本仏釈尊の、広大無辺なる仏恩を感じざるほど、そ

の大慈悲の前に、これまで本仏にそむき、法華經をないがしろにしてきた過去の誘法の罪を、懺悔せざるを得ない底において、たゞひたすらに懺悔し、その心が強ければ強いほど、また深ければ深いほど、人々の誘法をも、強く、より強くいさめにはおれなかつたものであり、この誘法苛責の伝道をもつて、みずからの罪に対する懺悔行としほど、本仏釈尊の大慈悲に対する報恩行とされたのでした。

そこには、如何に法華經を信じて本仏の功德をうけようとも、功德は功德、その功德が罪を消滅させるものでなく、みずからの罪は、みずからのが悔の行によって消滅しなければ、まことの仏果を成することは出来ないという、聖人の信仰の根幹が伺えましょう。

聖人の折伏伝道、それは聖人によつて折伏された人々が、この折伏を縁として、今生できなくても未來世において、何時かは必ず法華經を信仰するようになり、聖人のように他の誘法の者をいため難をうけ、その受難をもつて、滅罪と仏果を

同時に成ぜしめるという、三世因果に立脚した慈悲行ははかならぬものでした。

建長五年の春より弘安四年の秋に至る聖人三十一年の伝道は、文字通り法難迫害の連續でした。然しそのたびごとに迫害者に対して、一片の憎しみも怨みも懷かず、むしろ迫害者を大善知識・大恩人として感謝されていました。

報恩・懺悔・慈悲という、この三つの精神にもとづく伝道でなくして、どうして迫害者に対して感謝することが出来ましよう。分けても無量劫來の誘法懺悔に徹した心なくして、どうして自分を殺害しようとした人々までも大恩人と仰ぐことが出来ましよう。

因あれば果あり、過去の因を尋ねんとするならば現在を果を見るにしくはなく、現在の受難の軽重をもって、その因を尋ねれば、過去および過去世における誘法の罪の輕重を類推することが出来ましよう。

一切の受難の中でも、殉教の死ほど重いものは

ありません。聖人はその殉教の死の淵に立って、過去世において法華經の行者を殺害したこともあつたであろう最大の誘法をはじめとして、一切の誘法の罪が、こゝに一挙に消滅することが出来るという法悦を覚えられたのでした。そしてこの法悦があつたればこそ、聖人を殺害しようとした人々までも、恩人として仰ぐまでに心が高められたのです。佐渡御書に、

当世の王臣なくば、日蓮が過去誘法の重罪消し難し。

と仰せられ、種々御振舞御書に、

日蓮が仏にならん第一の方人（かとうど一味方）は景信、法師には良觀・道隆・道阿弥陀仏、平ノ左衛門尉・守殿（こうどの一北条時宗）おわしまさずば、いかでか法華經の行者とはなるべき。

と仰せられた言葉こそ、三数の法敵を、かけがえもない善知識と仰ぎ、受難を滅罪の証しとうけとめて法悦された、聖人の感慨を物語るものにはかなりません。

聖人六十一年の生涯におけるクライマックスは

振舞御書によれば、

いうまでもなく文永八年九月十二日の龍ノ口法難でした。この法難の直後、佐渡ヶ島に流配せられて、翌年の文永九年の二月、雪の塚原三昧堂の中で著わされた開目鈔に、

日蓮といふし者は、去る年九月十二日、子丑の時に頸切ねられぬ。これは魂魄、佐渡の国に至り……

と述懐された言葉は、断頭の座であった龍ノ口の法難によって聖人が、生死の巖頭を境として、これまでの俗体を死の淵に葬り、上行菩薩の魂魄に蘇生した人生的一大転換を示しているのです。この法難に際して聖人が、第二の國家諫曉を試みられたこと、並に裸馬に乗せられて市中引き廻わされる途中、鎌倉八幡宮の社頭において、「如何に八幡大菩薩、まことの神か」

と国神をも叱咤されたことは、あまりにも有名な出来事ですが、いよいよ由井ヶ浜にさしかつた時、熊王丸という童子を急使に立て、檀越四条金吾の許へ次のように伝えさせています。種々御

今夜、頸切られにかかるなり。この数年が間願いしことこれなり。この娑婆世界にして、雉となりし時は鷺に捕まれ、鼠となりし時は猫に食られ、或は妻に子に敵に、身を捨て所領に命を失いしこと、大地微塵よりも多し法華経の御為には一度も失うことなし。

されば日蓮、貧道の身に生れて、父母への孝養、心に足らず。國恩を報すべき力なし。今まで頸を法華経に奉りて、その功德を父母に回向し、その余をば弟子檀那等にはぶくべしと申せしこと、これなり。

愕然とした四条金吾は、取るものも取りあえず由井ヶ浜へ駆けつけました。金吾の胸中は、聖人の後を追う殉死の一念に張りさけんばかりでしたやがて一行が腰越の龍ノ口につき、こゝぞと思う所に急場の刑場が仕立てられました。いよいよ最後の時が迫るや、殉死せんとして近くに控えていた金吾が、胸もつぶれんばかりの悲しみの中、せめてもの今生最後の別れにと、声をしぼって、

「只今なり…………」

と呼びかけました。然後は嗚咽にむせんで言葉にならず、嗚咽は慟哭にかわりました。この時

聖人は静かにふりかえりながら、「不覚の殿ばらかな、これほどの悦びをば笑えかし。如何に約束をば、たがえらるゝぞ」

とさとされたのです。と次の刹那、江ノ島の方より、月のような光りものが突如として現われ、中天を渡つて、夜の浜辺を白日の如く照す、とう予想だにもしなかった天変奇蹟が起り、死刑執行人も警護の幕吏も胆をつぶして恐れ返く中、夜も白らんで来て、遂に聖人を打ち果すことも出来ず、龍ノ口より、そのまま佐渡へ流配して行つたのです。

これが龍ノ口法難の荒筋ですが、これまでの聖人の伝記によれば、第二の國家諫曉につゞく八幡社頭の國神諫言、そして龍ノ口における断頭の剣下、泰然自若として微動だにもせず、天の奇蹟をあらわされた聖人の姿を、如何にも不世出の英雄僧、憂國の傑僧として描き出し、ますく聖人を

超人的偉人・聖者として語り伝え、言い伝えて来ています。

然し聖人が、まさに頬はねられんとした今わのきわ、四条金吾をさとされた「これほどの悦びを笑えかし」という、その「悦び」とは、法難に殉する英雄の、死をも恐れぬ剛気な肚力より生じた悦びではなく、ひとえに無始以来の謗法の、幾世代、生れ替り、死に替つて積らさんとしても積しえき重罪の、今までに一撃に晴らされんとする受難悔罪の託しに法悦する、懺悔の底より涌き起つた悦びであり、またその「笑い」とは豪快な豪傑笑いのそれではなく、法悦にむせぶほゝえみですたのです。

今、龍ノ口法難における聖人の懺悔觀を通して過去の謗法觀をたずねてみれば、開目鈔に、

我れ無始より以來、悪王と生れて、法華經の行者の衣食田畠等を奪い取りせしこと数知らず。當世日本國の諸人の、法華經の山寺を倒すが如し。また法華經の行者の類を刎ぬること

と、その数を知らず。これ等の重罪、果せるもあり、未だ果さざるもあるらん。果すも余残いまだ尽きず。生死を離るゝ時は、必ず此の重罪を消し果てゝ出離すべし……（中略）今、日蓮、強盛に国土の誇法を責むれば、この大難の来るは、過去の重罪を、今生の護法に招き出せるなるべし。

と仰せられていますが、おそらく聖人は龍ノ口の法難に際し、過去の誇法を案すれば、「我れ無始よりこのかた悪王と生れて……法華経の行者の頸を刎ぬること、その数を知らず」

ということを実感としていたことでしょう。そしてこの実感は、独り龍ノ口の法難の際ばかりでなく、みずから伊豆に流され佐渡にも流され、或は松葉ヶ谷の草庵焼打の難にあって所を追われたり、或は弟子日朗上人の土牢の中に幽閉されたり、或はまた檀越四条金吾が主君江馬光時の勘気をこおむつて閉門されたりした、一門の受難のたびにも、その因をみずから過去の誇法に求めて、

「我れ無始よりこのかた、悪王と生れて、法華経の行者の衣食田畠等を、奪い取りせしこと數知らず……」と痛酷なほどまでに懺悔されていたことあります。

なお開目鈔のこの一節と同様に、過去世における誇法を数推された言葉が、佐渡御書の中に次のように述べられています。

日蓮もまた、かく責めらるゝも先業なきにあらず。不輕品に云く「その罪畢えおわって」等云々。不輕菩薩の無量の誇法の者に罵詈打擲（めりちょうちやく）せられしも、先業の所感なるべし。

如何に況んや日蓮、今生には貧窮下賤の者と生れ、栴陀羅（せんだら—屠殺者）が家より出でたり。心こそ少し法華経を信じたるようなれども、身は人身に似て畜身なり。魚鳥を混丸して赤白二蹄とせり。

その中に識神を宿す。濁水に月の映れるが如し。糞囊（ふんのう）に金（こがね）をつゝ

めるなるべし。心は法華經を信ずる故に、梵天・帝釈をも、なお恐ろしと思はず。身は畜生の身なり。色心不相應の故に、愚者の悔（あなど）る道理なり。心もまた身に対すればこそ、月と金にも譬ふれ。

また過去の誇法を案するに、誰か知る、勝意比丘が魂にもや、大天が神（たましい）にもや、不輕々毀の流数なるか、失心の余残なるか、五千上慢の眷属なるか、大通第三の余流にもやあるらん、宿業ばかり難し。

こゝにいう「勝意比丘」とは、諸法無行經といふ經典の中で、喜根菩薩が諸法実相を説くをみてこれを虚妄邪見の説とそしり、その罪によつて多くの弟子男女と共に大地獄に墮ちたといわれている人であり、「大天」とは仏滅後の教団の中にあって、異説をとなえて教団を分裂せしめた人。次に「不輕々毀の流数」とは、法華經第二十章の常不輕菩薩品の中で、不輕菩薩を迫害した四衆と同数の人々のことであり、「失心の余残」とは、法華經第十六章の如來壽量品の中ににおいて、本仏釈

尊の心にそむき、邪法を信じて本心を失い、毒發悶乱したまゝ遂に心醒悟することも出来なかつた人々のことをいへ、「五千上慢の眷属」とは、法華經第二章の方便品の中において、釈尊が方便の門を開いて眞実を示さんとした時、釈尊を輕笑して法蓮の座より立ち去つて行つた増上慢なる五千人の人々の、その眷属を指すものであり、「大通第三の余流」とは、法華經第七章の化城喻品の中ににおいて説かれた大通智勝仏の時代、この仏の十六王子が、法華經を説いて下種結縁せしめた三種の人々の中、一には直ちに成仏の大果を得たものの、二にはその後、他の教えによつて仏種を熟して成仏することを得た人々、三には遂に仏種を發するにも至らなかつたものという、その第三の人々の余流を指しているものです。

これをもつて思えば聖人は、法華經々典をはじめ八萬法藏の一切經の中にあらわれてゐる仏法に敵対した人々の姿を見るにつけても、その誇法の姿こそ、過去世における自分自身の姿であつたのではないかと懺悔に責められ、懺悔に責めら

るゝ心の切であればあるほど、經典にあらわれている謗法者の姿を、すべて過去の世の自分の姿として、おのゝかざるを得なかつたものと思われるのです。

過去世の因は、現在の果を通して数推するほかはありません。数推は、あくまでも数推であつて或は正鵠を得たものではないかも知れません。然しこの場合、重要なことは、それが正鵠を得たものであるかどうかということよりも、それほどまでに懺悔に徹しておられた聖人の心にあるのです

蓋し聖人の謗法懺悔は、過去世の因を数推することばかりから起つたものではありません。天福元年五月十二日、聖寿十二才にして清澄山の道善房の室に投じて以来、建長五年四月二十八日（聖寿三十二才）清澄山頂に立教開宗を宣言するに至るまで二十一年の間、たとえ求道のためとはいへ念仏・禪・真言・律、等々八宗兼学の苛烈なる修行中においては、それぐの教えに従つて法華經を誹謗したこととも事実であったことでした。

念仏修行の時代には念仏者になり切り、真言を修行した時代には真言僧になり切っていたため、それぐの奥義をきわめ、そのあやまりも理論上ばかりでなく、身をもつて体験し、これが後に四個格言となつて痛烈なる折伏へ転じて行つたのですが、その修行の過程にあって法華經を誹謗するにも、また真剣そのものであつたはずです。聖人は今生のその謗法のあとをかえりみられて、生渡御書に次のように述べられています。

日蓮も過去の種子、すでに謗法の者なれば、今生に念仏者にて数年が間、法華経の行者を見ていた「未有一人得者」「千中無一」等と笑いしなり。

今、謗法の酔い醒めて見れば、酒に酔える者の、父母を打ちて悦びしが、酔い醒めて後、嘆きしが如し。嘆けども甲斐なし、この罪消えがたし。

如何に況んや、過去の謗法の心中に染みけんおや。經文を見候へば、鳥の黒きも、鶴の白きも、先業の強く染みけるなるべし。

あゝ聖人のこの述懐を、誰か涙なしに捧するこ
とが出来ましよう。我が身のことながら、いたい
けなき十二才という幼少の頃、志を立てゝ仏門に
投じて以来、少年時代・青年時代にかけて求道の
ためとはいゝながら、知らずに犯して來た謗法の
事実を卒直に認め、これを生涯にわたつて懺悔し
抜かれていたのです。

そこには、久遠の本仏釈尊の実在を確信し、法
華經は生きている聖典、といふ確固たる信仰がな
ければ、到底これほどの懺悔の出来ようはずはあ
りません。

末代悪人等の成仏・不成仏は、罪の軽重には
依らず。たゞこの經の信・不信にまかすべし
とは文永十年八月、波木井の南部夷長へ与えら
れた手紙の中の一節ですが、貧富貴賤の如何にか
わらず、罪の輕重にもよらず、一切衆生を平等
に、常に我が子として、いつくしむでおられる久
遠の本仏釈尊の大慈悲を、法華經を信するが故に
身にしみて感ずれば感するほど、たとえ微塵のよ
うな小さな罪でさえも、ゆるがせにせず、これを

懺悔して自他ともに滅罪を証しし、ひたすらに
仏恩に報すべく、地上の仏國土建設の願業に、生
涯を捧げられたのが日蓮聖人であつたのです。

以上、概略口蓮聖人の人間像について、これま
で社会一般の人々よりは憂國の英雄的予言者とい
う一面しかみられなかつたり、他宗を攻撃してや
まなかつた斗争的人物といふうにしか思われて
いなかつたり、或は日蓮門下の人々よりは、上行
菩薩の再誕という位置から、勢い超人化されたり
偶像化されて來た通弊を是正し、まことの聖人像
との信仰を逕彌りにすべく、これまで殆ど顧り
みられていなかつた聖人の内省的謗法懺悔滅罪觀
をたどつてみました。

これによつて聖人の謗法懺悔滅罪觀が、如何に
痛酷なものであったかということが、いさゝかな
りとも明かにされたことゝ思います。さて、こ
ゝで問題となるのは、日蓮聖人という一人の人間
の内に、上行菩薩の再誕という人間像と、謗法の
懺悔滅罪に徹した人間像、という水火あい容れぬ

両極の、矛盾した二つの人間像が共にある、ということです。

これを過去世にさかのぼって言うならば、一方は久遠劫來、片時も流转したことなく、懺悔すべき何ものもない高貴な大菩薩であり、他方は過去遠々劫來、無量深重なる罪業に生々流转して来た荒凡夫であって、この流转した魂と、流转したことのない魂とが、日蓮聖人という一人の人間の中に共存し、しかも互に比例し自乘しあつてゐるということです。

この矛盾は、一体どうすれば解決されるのでしよう。この解決によつて、まことの日蓮聖人の人

間像も理解され、その信仰体系も把握されて來るのではないでしようか。

勿論、この矛盾は、矛盾を解決しようとする側に感ぜられるものであつて、聖人自身にあつたはずはありません。

では、この二つの人間像と、二つの魂は、どのようにして聖人の内に、矛盾することなく調和していたのでしょうか。若し矛盾していたのであれば

どうして矛盾したまゝ矛盾が矛盾でなくなつていったのでしょうか。

それとも罪惡深重の身のまゝでも、地涌の菩薩の使命に生き、上行菩薩の再誕という自覺と自負を持つことが出来るのでしょうか。或は逆に、上行菩薩その人であつても、誇法を犯し、その罪業を背負つてゐる、とみなされるのでしょうか。

思えば釈尊でさえも、仏陀の身であられながらなお生涯にわたつて懺悔に徹しておられた、という事実がありました。聖人の場合においても、それがと軌を同じくするものである、ということは出来ないでしようか。

上行再誕という最高の自己肯定と、誇法懺悔といふ最底の自己否定、その接点に、眞実なる聖人の人間像があるとするならば、我等もその接点に立つ時こそ、聖人の眞実にふれ、その信仰を継承し、煩惱具足のまゝ仏果を成する道が開けて來るのではないかでしようか。

△以下次号▽

讀者場

報」ですら（隔月発行）継続するのに原稿が集めにくいほどです。
精々頑張って下さい。再刊のお祝いに金五千円也お送りしました。何かの足しにして下さい。

（五月十五日）

出ませんでしたので、この点は安心かつ心強く思っていますが、学生運動が風潮に流されて進路をあやまつぬよう、十分心しております。
青年指導を中心とする「鷦鷯」誌の発展を心より祈り上げます。

（五月五日）

青年のために

至難な文書伝道

立正大学教授 文学博士

京都今山頂妙寺貫首

布施浩岳

「鷦鷯」一部御送附、有難う。

第六巻五月号ともあるし、再刊第一号とも記してあるので、暫らくぶりで再刊になったものと思います。文書伝道も結構ですが、長期に亘る連続刊行には、さぞ骨の折れることと思います。

今、京都で出版している「日蓮新

立正大学仏教学部長

文学博士

野村耀昌

香川源口の候、益々為法為宗の御

精進、慶賀申上げます。

陳者、本日久闊に再刊「鷦鷯」誌

拝受、一氣に読了いたしました。鷦鷯峰会のこれまでの経過についてお聴めになられた文、特に感銘深く回顧いたしました。

飛行便で遠く南方タイ国まで鷦鷯再刊号をお送り戴き、厚く感謝すると共に、衷心より再刊のお喜びを申し上げます。

今、当地は雨期を前の最も暑い季節。この再刊号を、主幹は九州上野峠に在って書かれたと知り、曾てこの山峠で、同行の法友と一緒に百日間ほど修行したこともあつただけ

小生、昨年四月より学内雑務を担当することになり、時節柄、連日登校して雑用掃除にかけ廻つております。ケバ組は仏教學部からは一名も

の滝」の冷風が、ここまで伝わつて来るかに思つて一氣に読み終りました。

この記事の中「鷺峰会の歩み」は純な感動を呼び起してくれました。忘れかけていた種々の出来事を蘇らせるに充分でした。

中でも雪の比叡山での擊鼓行脚は一人天台宗の学僧だけでなく、私自身にとっても一つの転機でありました。日頃、出家の姿こそし、題目をも唱えながら、信仰的感動を知らなかつた私に、在家青年男女の感動の姿は驚くべきであり、それが自らの感動と伝わり来て、信心というものを真剣に考えさせる、うれしい、忘れ難い記念日となつたことでした。

今も時々思い出しては、吹雪の中を克苦法悦にむせびながら歩いて下さった皆さんに感謝しています。

駒として、記憶の外へ飛び出してしまっているとも思えます。
信仰者の歩みといふものは、大概こうした道……つまり、はじめは本当に純な感動を得るが、そのまま続かないで、自分の思惑を入れ始め、離らせ、歪ませ、それでも自分は、ひとかどの信仰者だ、と本心そう思つていると、そのうち進退きわまつて、第二の信仰的覚醒をせざるを得なくなる、という歩み方をするのではないかでしようか。

そして第一次信仰的感動体験も、第二次の信仰的覚醒も、その内容は大同小異、結局、ものところにものどるものだと思います。

法華經の主張も、私ども狂子の、本心への目覚めにあり、そのためには不自惜身命と厳しく説かれるけれど、釈尊の本心は、質直意柔軟といふ、すなおな心、涅槃經（ねはんぎょう）に云われる嬰兒行といふところにある、と信じられます。

我不愛身命の真剣さも欠ぐべからず

ざる信仰者の要件ですが、何にもまして幼児のような柔軟心を、宝として忘れないもののです。

「鷺峰会の歩み」を読みながら、「お前も随分にこって来た。柔軟心を忘れるでないぞ。題目ばかりを唯信じて、唱題すればよいのだ」と、自分自身に言い聞かせております。

今日もスコールを期待しましたが望みは空しいようです。ヤシの木も数ヶ月間の炎天下に、せっかくの実を茶色にからかしてしまいました。

（五月十六日）

同行の心の中に

身延短大三年

小畑友宏

しだれ桜からばたん園へ、移りゆく身延の境内の季節も、はや初夏の

日さしを迎へ、月日の速さをさまざま示してくれる今日この頃でござります。

私が出家を志して身延山へ上の前初めて九州上野峠へ参りましたのは一昨年の七月九日でございました。その日をふりかえりますと、色んな意味での数々の出会いがございました。

今ではタイ国で修行中の川島師、大阪で布教中の木村師、アメリカ留学中の富村先生が、当時既に山峠の修業に入つていて、豪雨の中を出迎えて下さいました。まずはこの三師と初対面の歓談に花を咲かせました。その日の日記には、「流は水に狂い、近くに雷が落ちたまるで自分の迎撃のようである」と記されてあります。

それより始まつた上野峠の思い出は、行脚・水行・福智登山・数々のデスカッショーンをも含めて、信仰生活には全く無垢であつた私にとりましては、全く別世界であつた嬉しさ

がございました。

勿論、私共数名の青年僧の行動の中には、私如きでは到底閑知することができない主幹先生の厳しい現状把握と洞察のあつたことは、今になつての私の微少なる反省の一部であろうとは思いおりますが、ともかくも上野峠の恩い出は、仮りにも出家と名のつく世界の第一印象と結びつき、終生の想い出となり励ました。りましうことは、ひとえにお導き下さいました主幹先生、並に道友の皆様のおかげと感謝せすにはいたれないのでござります。

その後、身延へ登り、本妙庵に居住して主幹先生の膝下より大学へ通い、本妙庵僧風の中で、僧人としての道をみきわめつつありましたが、故あって先生は九州へ下られ、私共学生も本妙庵より四散せざるを得なくなりましたところ、とのたび思ひ出の上野峠より「鷺峰」が再刊され感慨無量なるものがござります。

やがて来る梅雨の後の避暑地上野

峠とて、酷寒期ともなれば雪中佐渡の宗祖を偲ぶが如くですが、二十世紀を迎えるとする今日、先生には法体の大切さを充分考慮の上、著述に道場建設にいそしまれることをお祈りする次第です。

川島師は渡タイ以来、はや一年となりました。木村師には三月末の関西街頭布教で一緒にさせて頂きました。高村先生もアメリカで心脳心理學・唯識の研究で止頬斷眠されていました。高村先生もアメリカで心脳心理學・唯識の研究で止頬斷眠されていました。

鷺峰会の同志の人々の活躍が、ようやく各地で動き始めた感のする今は、鷺峰誌を通して心と心を結び、励ましあつて来たるべき日を期したいと存じます。

私も来春、身延大学を卒業後は東京の立正大学へ入りたいと思い、残り少し身延生活を、より意義あるものにせんと、連日思索しつつ、鷺峰誌と鷺峰会の発展を、微弱ながらお祈り致すものでござります。

上野峠釈尊像入仏式

仏像は生きている

去る五月二十三日（旧四月八日の釈尊降誕会）上野峠鷲峰苑行学道場において、道場本尊としての久遠の本仏釈尊像の入仏開眼式がいとなされました。

連日梅雨のような雨の続いていた



佐々木妙定法尼がはるばる法筵にかけつけ、道場内は立錐の余地もなく參詣者は參道にもあふれる盛儀の午後一時より入仏開眼大法要、世界平和祈願について、主幹の「本仏信仰と一般信仰」と題する法話があり、地元赤池町長木村繁太郎氏は町公議の合間をぬつて挨拶にかけつけ、また赤池町出身の衆議院議員（外務次官）田中六助氏の長文の祝電は錦上華をそえ仏像建立に協力して參詣した信徒の大部分は、日蓮宗外の他宗の人々でありながら、この日ばかりは異口同音に、高らかにお題目を唱えて、宗派の別を越えた釈尊像の入仏式にふさわしい式典でした。

この仏像の原型は西暦一・三世紀の頃、西北インドのガンダーラ地方においてギリシャ系の人によって作られた、世界で最も古い石仏であつて、通常ガンダーラ仏像と呼ばれ、世界的に有名なものです。

申すまでもなくガンダーラ地方は西暦紀元前アレキサンダー大王のインド侵入以来、早くよりギリシャと交流して、その影響をうけていた地方ですから、そこへ中インドより伝播して興起して来た大乗仏教も、必然ギリシャの文化、殊に多神教的偶像崇拜に勅載され、これまで菩提樹や法輪を以つて釈尊を象徴していた風習から、一举に仏像の造立へ転じこのため初期の仏像は、本来釈尊御在世當時剃髪されていたにもかかわらず、有髪のヘヤースタイルもギリシャ式となりお顔も彫りの深いアーチ

リヤン系の相として現わされていま
す。

今日に見るような釈尊の頭髪の螺
髪（らほつ）となつたのは、これよ
り後、釈尊が益々神秘化され、三十
二相・八十種好という思想の起つた
結果にすぎません。

さて、このガンダーラ仏像は、東
京日本橋の三越デパートの巨大な天
女像を作製した彫刻家によって、曾
つてインドの現地において、石膏で
型をとり、複製して日本へもたらさ
れていたものです。

これを更に複製したのが京都平安
芸能の富山高博師ですが、上野峠の
釈尊像造立に当つて富山師が、この
複製像を本として青銅で作製したもの
のですから、上野峠の釈尊像はガン
ダーラ仏像の原型と寸分も違わない
ものと申せましよう。

なお、この仏像は、

高さ二尺二寸、重さ八貫目。

富山師は、インド靈巖山の仏舍利
塔正面本尊として、身延山より寄進

された釈尊像の鑄造をはじめとして、
日本全国各地における日本山の仏舎
利塔に安置する殆んどの釈尊像を謹
製しており、身延の本妙庵の釈尊像
も富山師の手になるものです。

従来、釈尊像の相としては降魔成
道の相、合掌の相、座禅三昧の相、
等と種々ありますが、上野峠道場の
本尊として取てこのガンダーラ仏像
が原型のまま作製勧請された所以は
法華經の寿量品に、

常に法を説いて、無数億の衆生

を教化して、仏道に入らしむ

という久遠劫來、永遠の未來にか
けて変らぬ說法炬の文託に符合して
いること、並に法華經靈山虛空会上
の本門八品における久遠の本仏釈尊
とは、歴史上のインド人釈尊の奥に
あるものでもなく、またそれを超え
たものでもなく、その時点における

釈尊そのものであるという日蓮聖人
の本尊觀にあらずものであります。

入仏式の折、この仏像に三重の金
箱をうつて最後の仕上げをし、仏像

の台座まで作製された直方の長谷川
仏壇店社長長谷川才蔵氏は、次によ
うに挨拶されています。

「この御仏像の最後の仕上げの光栄
を得た私共は、全社をあげて身も心

も清めて作業に当りました。そして

式典にそなえて前もって御仏像を上
野峠の道場へお運び申し上げたのは
たまたま道場月例の三宝供養日であ
る五月十一日であり、しかもこの日
に建てられた道場の門柱のくぐり初

めをしていました。雖も予期しなかつ
たこの二つの偶然が重なれば、もは
や偶然とは思われません。ひとえに
仏様のお計らいというほかなく、
仏像は生きているという実感にうた
れずにはおられませんでした。」

なおこの仏像は、福智山行学道場
の本建築の出来上るまで、且下參籬
所に安置されていますが、本建築完
成の暁には、この釈尊像の脇士とし
て上行・無辺行・淨行・安立行の四
大菩薩が添えられることになつてい
ます。

国宝とは何物ぞ

木村義賛

四月二十八日、沖縄デー。この日、日本全国が騒然とし、学生集団による烈しい行動が、一日中、報道機関から流されている最中、一人の大学生が単身、山奥の滝に身を挺して祈りを込めた。

その学生が熱っぽく語った。

「私は学生運動に参加したい衝動にかられる。然しあの運動には何かしら欠けている物足りなさを感じる。一部の学生であると思うが運動で逮捕されるや、裁判で簡単に自分の考え方をひるがえしたり、卒業と一緒にひるがえしたりする」

そう思った時、自分自身が何ものにも屈せぬ不抜の信念をもち、

何ものにも曲げられない自主性をもつ人間となり、人のため社会のために、そして國のために役に立つたい。」

私は思う、何十万という学生の集団行動よりも、この一人の学生の祈りの行動の方が尊い。現在の日本全国の学生の中に、かかる学生が一人でもいたことに、日本の前途のため心強さを覚える。

組織の力にたよらず、一人でも敢然として真実を求める青年こそ真に國を救う者となつていくのであるまい。伝教大師は六台法華宗年分學生式の中で、

国宝とは何物ぞ
国宝とは道心なり
道心ある人を名づけて
国宝となす

多々美術品を作り出すだけの人も少ない。また今は、それほどの国宝的芸術品を作り出すだけの人も少ない。道心ある人は更に少い。

まことに國を憂う時、道心ある青年を、正法の中に生かしめるこそ、僧侶の使命ではないか、と強く感ぜさせられたことである。

(大阪市妙満寺方丈中)

本仏の息吹き

木田量久

少々学問した者は、自己流の教學を得意げに論ずるが、信仰は形式で流れている。祈禱や靈供養をこととする者は、靈的現象を追うことにしてしまっている。これが宗門人の通弊だが、そこには菩薩道が忘れられている。

たゞ元名はなくとも、まことに菩薩道を黙々として歩く者、そ

人の全身には、久遠の本仏の、宇宙の大息吹きが、温くたたよつている。そういう人こそ仏法のいい手であり、現代に最も望ましい人物である。

全宇宙に脈うつ本仏の鼓動に耳をかたむけよ。我々の生活の隅々にまで、常に通つてゐる本仏の、温き息吹きを肌にも感ぜよ。そして白らそれを呼吸せよ。本仏を離れて仏法はない。

(牧場主)

仏 法 山 眠 浅 見 行 俊

身延山大学より立正大学へ転校し、横浜の某寺で働きながら通学して、はやくも二年有余を経過しました。そのお寺には身延の本妙庵のような凜とした僧風ではなく、僧侶は生活のため袈裟をまとつた商人で

しかりませんでした。それは、このお寺は限つたことではないかも知れませんが、宗門全体をおおう陰卑な縦横関係や封建性・因襲等は滑稽に思つだけではすまされません。その中におれば自分自身もガンジガラメとなり僧侶・寺院・宗門の在り方に對して不信・絶望すること、おびただしい状態です。

仏教への憧れは強いのですが、僧侶への疑惑はぬぐい去られず、官沢賢治のように在家でありながら、純粹に法華經を実践した方にむしる眞の仏法が生きているようにしか思われません。

もはや寺院の陰卑因襲に堪えられず、そのお寺を出て、心の通う学友と二人で自炊し、アルバイトをしながら学校へ通つていますが、かえりみるならば私尊もバラモン教団や六師外道の外に仏法を興しておらず、日蓮・法然・親鸞・道元

等の各師も比叡山をはじめとする旧仏教の外に出て、それぞれ鎌倉新仏教を興していきます。

今や仏法山脈は、新しく築き上げて行くほかに仏法興隆は期し難いのではないか。崩れゆく旧米の仏法山脈の中にあって、これを建て直そうとする努力も尊いことでしょうが、その巨大な山崩れに埋没されない確信をもつ人が果して幾人いるでしょう。

全国的な学園紛争等の社会状態も一九七〇年の安保斗争をひかえて、國家的危機のいよいよ緊迫している時、今後の日本国の生き方に対する、適確な指針を与えるべき僧侶が、果して幾人いるでしょうか。

世のすべての人々のよりどころとなり、如何なる台風にも動ぜずしかも台風を鎮めるほどの大仏山脈を築かねばならぬ時ではないでしょうか。

(立正大学三年)

インドへ太鼓を

送りましょう

佐々木 妙 定

お駕迎さまが法華經を説かれた印度の靈鷲山における仏舍利塔落慶

大法要は、本年十月二十五日、イン

ドの大統領をはじめ各国の大公使等の世界中の代表者を集め、仏滅後未曾有の大式典として挙行されることが確定し日蓮宗管長（身延山法主）猊下も國賓として招聘され、日本代表巡拜団をともなって渡印されたこととなりました。

このため昭和四十年の二月、身延

山からは仏舍利塔正面本尊として金銅の釈尊像が寄進されており、また

この日のため不肖私も同年の三月、

1、宗祖御使用の注法華經の影本

2、これを納める経塔

3、法華經十卷五部の経石

4、五万巻のお題目の経石

5、直徑二尺六寸六分の大太鼓六台

6、直徑一尺のウチワ太鼓三百張

右をインド靈鷲山へ奉納すること

を発願し、身延山法主猊下をはじめ日蓮宗総長猊下、五大本山の貫首猊下等々の御推薦をたまわり、爾来四ヶ年間、全国各地に淨財勸募の行脚をつづけさせて頂きました。

幸い注法華經の影本は国宝内古式

の表装で整えられ、経塔は京都鞍馬

寺の経塔（国宝）に凝して日本美術

工芸品として世界に出しても恥しく

ないほど見事に完成し、昨年八月十九日身延山へ奉納され、四万個の経

石と共に身延山からインドへ送られ

ることとなりました。

このため昭和四十年の二月、身延

内に納められました。

次は六台の大太鼓と三百張のウチ

ワ太鼓を送ることです。この六台の大太鼓とは身延山久遠寺をはじめ池

上山の本門寺、小渕の誕生寺、清澄の

寺、という日蓮宗を代表する総本山

と五大本山から、それぞれの名のもとに一台ずつ靈鷲山へ贈るものであ

り、ウチワ太鼓と共に、靈鷲山へ参

拝した世界各国の人々が等しく太鼓

をうつて異句同音にお題目を唱える

よう計らうものであります。

太鼓の作製費、並にこれをインド

へ送る送料あわせて総予算六百万円

が計上されています。

落慶大法要は眼前に迫っております。

太鼓の奉納はそれまでに間にあ

わせねばなりません。

全国の皆様、なにとぞ此の淨業達

成に御協力たまりますよう、伏し

てお願い申上ます。

東京都大田区大森西六の八の二

佐々木 妙 定

如來法王使

日蓮聖人伝

講妙会

井上清純先生は元貴族院議員（男爵）青年の頃より本多・生上人に師事して、法華經をきわめ、立正安國の祖願達成を期して、法華經精神と日本國体觀の鼓吹に努め、月刊宗教誌「宝樹」を刊行しつつ全国的に布教をされた、近世稀なる在家の大居士であり、教學者でありました。

昭和三十七年一月五日、八十三才をもつて遷化され、特旨により今上天皇より大杯の榮を賜わりましたが遷化の前日まで法華を開いて法華經を講じ、本門戒壇建立を遺命された

ほどでした。

先生の著作は龐大なものです。生前（昭和三十二年の秋）出版された「妙經、如是我聞」と題する大著作、並に没後三回忌に当つて遺稿あいよつて出版した遺稿「日蓮聖人御遺文・六部疎」は、その代表的なものです。

このたび先生の第七回忌に当り、前著書に加えて三部作となすため遺稿「如來法王使・日蓮聖人伝」が刊行されることとなりました。装幀組方、紙質、製本等その他すべて前著書と同一なることが期されています。その序文に、先生みずから次のように述べられています。

「日蓮聖人伝の世に出たものは汗牛充棟もただならぬが、多くは一宗の祖師として、しかも聖人自身として筆にも口にしたことではなく、或は日蓮宗と云い法華宗といふ後人のさかしらで、聖人の本意ではない。

宗教家としての聖人は、法華經の

行為者であった。釈尊出世の本懐、諸経中の最勝王經と信じて、如説にこれを行じたのであるから、諸宗を超えたと同時に、生をこの国にうけた日本人としての聖人は、国の柱となり眼目となり大船となると誓つた通り、大日本精神の代表者を以つて任じていたのである。

この抱負とこの自信が果して当を得たか否かは、一宗一派は勿論、崇敬する諸宗門を超越した全日本人の手によつて検討されなければならぬ、今、當にその機ではないか」なお本書は講妙会自費出版のため目下予約申込みを受付けています。

頒布価額 一部 二千円（送料共）納入方法 昭和四十五年三月末まで

申込先 東京都渋谷区西原二の十八の六、鈴木三七雄あて
分割支払い可

本書購入冊数、代金納入方法、住 所、氏名を明記の上お申込み下さい

本誌賛助者御芳名

月刊誌の発行には運営上、発行資金において特に困難のともなうものであり、頁数をふやし、内容の充実を計るために、理解ある篤志家の御協力、御賛助を仰がなければなりません。

ここに本誌発行資金として特別御寄附をされた方々、並に毎月一万円、五千円、一千円というように特別賛助を申出られ、月額分を御志納された方々及び普通賛助会員として毎年、年間三千円の御賛助を申し出られ、本年度分を御志納された方々に対して、次に御芳名をかかげ、衷心より深く感謝の意を表します。

特別寄附者御芳名

一金、一万円也

大阪市南区谷町八の十四の三

妙経寺

西川友義殿

一金、五千円也
京都市左京区仁王門通り大菊町

本山頂妙寺貫首

一金、五千円也

大阪市南区谷町 妙経寺内

一金、五千円也

静岡県小笠郡大須賀町東新町

本涼寺

松下貞賢殿

毎月一万円特別賛助者御芳名

横浜市南区井戸ヶ谷中町一八一

大糸物産株式会社

猪瀬秀成殿

毎月五千円特別賛助者御芳名

大阪市西区立売堀北通り四の六

宮本商会

宮本龍一殿

一金、五千円也

福岡県直方市古町銀天街

長谷川仏壇店

一金、五千円也
長谷川才蔵殿

東京都

匿名者殿

一金、五千円也

神奈川県船越琴子殿

一金、二千円也(二回分)

東京都秋元庸吉殿

一金、一千円也

大塚とみ子殿

千葉県長谷川照容殿

静岡県中山房殿

扶助会費志納者御芳名

一金、三千円也

東大阪市

木村和田殿

伊藤友情殿

山田俊行光殿

浅見枝殿

伊藤友情殿

御本人の御希望により
特に住所御芳名を伏す

毎月一千円特別賛助者御芳名

神奈川県船越琴子殿

一金、二千円也(二回分)

東京都秋元庸吉殿

大塚とみ子殿

千葉県長谷川照容殿

静岡県中山房殿

扶助会費志納者御芳名

一金、三千円也

木村和田殿

伊藤友情殿

山田俊行光殿

浅見枝殿

伊藤友情殿

横浜市
 東京都
 富田林井田出見賀
 芳通しげ治子子子俊
 殿殿殿殿殿殿殿殿
 小浅有賀行義雄
 殿殿殿殿殿殿殿殿
 瓦樓藤井辰子俊
 殿殿殿殿殿殿殿殿
 次に誌代を御納入された方々の御
 芳名をかけ、本誌御愛読に対し
 厚く感謝申上げます。

誌友紹介

静岡県　群馬県　神奈川県　名古屋市
 岡山市　福岡県　鹿児島市　小内鈴木
 北海道　松木木野石松下田岡崎井下
 間下間和数妙康恵貞文淳海星賢子
 藤一郎子子海充行仙殿殿殿殿殿
 殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿

名古屋市　東大阪市　大阪市　京都市　山梨県　静岡県
 長谷川原木田川村川見田井村村内葉野畠田住上上下木田
 茂丈成海俊園義友行義　潤高典敬経友孝み芳貞是淳
 夫子憲仙子枝賀義光清一雄男治夫宏代じ豊宏賢精子
 殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿

熊本市　福岡県　北海道　三重県　茨城県　群馬県　兵庫県　宝塚市　芦屋市　神戸市
 永中渡日光松木重松高林木佐吉篠佐佐山西清辻山谷
 石野　高吉岡下藤田崎　間藤崎塚木野本島水木本口
 光俊ハ義志和籠保　芳延妙啓日出是良比增若柳紀益
 麗泰ルヨ隆子子二子忠磨行海見人流順子一子宏子栄
 殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿殿

釈尊像建立御礼挨拶

読者の寄稿

購読の有無

このたび上野峠鷲峰苑福智山行
学道場の本尊・久遠実成の本師釈
迦牟尼仏像建立に際しましては、
地元福岡県下の有志の宗旨の如何
をとわぬ御協力をたまわり、更に
本誌を通じて贊助会員、並に誌友
の方々の、北は北海道より南は鹿
児島の果からも心をよせて御協力
を恭くしましたこと、深く感謝申
上げ御礼申上げます。

今後、鷲峰苑道場は、この本仏
釈尊の大慈悲を本として万教皈一
の運動を展開し、日本仏國土建設
の一環となつて行くことであります
しよう。

ここに御協力者の御芳名を道場
に留めて、一層の仏道御精進をお
祈り申上る次第であります。

上野峠鷲峰苑福智山行学道場

山主 日高白象

世話人一同

全国各地の誌友皆様の本誌に対
する御愛顧・御愛読を心より感謝
申上ます。

かねてより編集部としましは、

全国各地の誌友より寄せられる短
編原稿を、数多く盛りあげて、バ
ラエティーに富んだ雑誌にいたし
たいものと心がけております。

またそのことによって、本誌を
介して誌友の心と心がつながり、
互に参考になることが多いものと
思われますので、進んで御寄稿下
さいますよう、お願い申上ます。

原稿は五百字以内のこと。
一、時事寸言
一、読後所感
一、その他

なお信頼体験談の場合には、四
百字詰原稿用紙十枚以内にお願い
します。

特にこれまでの贊助会員にして
一般読者となられる方や、一般読
者から贊助会員になられる方は、
その旨をお通知下さいますように
お願い申上ます。

木誌再刊第一号の五月号発送の
折、
1、贊助会員継続の有無
について御返事をたまわりますよ
う返信用ハガキを同封いたしまし
たところ、さつそく各地より返信
が殺到しましたが、なお半数の方
々より未だ御返事を頂いておりま
せん。

御返事のない場合は、従来通り
御連絡のことと信じて、今後とも
御送本申上ますが、なお念のため
その有無を明確にして頂けます
れば、幸いに存じます。

編集後記

★四月の末、本誌再刊第一号の五月号を発行して以来、連日殺到する読者のハガキは「購読の継続」が圧倒的で「中止」は僅か二十通足らずでした。★これは全く予期しないことで、身延山を去って遠く九州の近地より再刊した本誌であれば、おそらく読者も半減するものとばかりに思っていたからです。★然し蓋を開れば読者ばかりでなく賛助会員までも新たに増えて来ました。これは一体どうした現象なのしよう。★不思議に思いながら台帳整理に追われる一方、さつそく六月号の執筆にかかるのですが、「日蓮聖人の懺悔」と題する稿では頭打ちしてしまいました。★この稿の内容についてはこれまでの講演会や座談会で、機会あるごとに進んで取りあげては論じて來ていた★この稿の内容についてはこれまでの講演会や座談会で、機会あるごとに進んで取りあげては論じて來ていたが、今度の執筆にも自信をもつていたつもりです。★所が案に相違して「説法罪の意識と懺悔」

のあたりになると、すっかりベンガル化してしまい、私自身ノイローゼにもなるばかりでした。★原稿の締切日もすぎ、五月の月も去り、暦は六月に入りました。あせればあせるほど書いては破る原稿ばかりでした。★「大罪なれども懺悔すれば、その罪消ゆる。小罪なれども懺悔せざれば悪道まぬがれず」とは日蓮聖人の諒められたところですが、社会的大罪というほどの罪を犯した覚えもなくまた犯した小罪に対して身も心も打ちふるえるほどの懺悔をした覚えもない私が、まして信仰上、説法罪などを理屈では述べても、我が身に当てて実感として意識したためしがあるはずもなく、そんな者が、どうして日蓮聖人の懺悔について語る資格があるうか!と反省させられるに至った時、これまで信仰に狎れ、教学的にも思い上っていた自分自身の罪を知り、これこそ説法罪と氣付いて、おののかざるを得なかつたことをした。★そしてそのおののきの中

に、やっとこの稿が脱稿され、予定通り一月も遅れて六月号が発行されました。六月号の発行遅延したこと謹んでお詫びする次第です。(白象)

鷲峰六月号

昭和四十四年 第六卷 第二号

通巻 第四十号

昭和四十四年六月一日発行

定期 七十円

送料 二十円

発行兼編集人 日高白象

印刷所 相良印刷所

発行所 鷲峰会

福岡県田川郡赤池町上野峠

鷲峰宛 福智山行学道場

電話赤池(有線)一一五

振替口座 福岡二〇一五八

郵便番号 八二二十一

誌代 六ヶ月 五百円(送料共)

一ヶ年 一千円(送料共)

特別賛助会費 一ヶ年 一万円

普通賛助会費 一ヶ年 三千円

鷲峰会發行

大罪なれども
懺悔すれば
その罪消ゆ
小罪なれども
懺悔せざれば
惡道まぬがれず